



同志社人物誌 (34)

柳 島 彦 作

足 立 宇 三 郎

柳島彦作と日本的美

すぐれた英語学者、親切で情熱に溢れた教師、自由なる英詩の作家、友人としては、すべての友に愛された人。このような柳島彦作君が、昨年四月、住まいを天上にうつしてより、ここに一年が過ぎた。柳島君をまじえた

われらのグループ——玉松公叙、加藤延雄、秦孝治郎——として、六十年間交調もなく交りきた者にとって、柳島君を送ったことはまことに長き恨みである。今改めて、彼について若干の感想を綴ってみたい。

柳島を語るためには、順序として、まず英語の勉強からはじめねばならない。

彼のために英語の窓を最初に開いた人は、自叙伝にも述べているごとく、小学校の宮原公三先生であった。高等小学校で英語への憧れをいだいた柳島は、そのコースを追うて、特に同志社中学を選んで入学した。ここでの下級生の英語は塩瀬千治、米人シャイベリー先生らが担当した。四、五年では、グローバー、ダンニング、飯塚恒太郎先生等に導かれた。そしてことに飯塚先生が、中学生として勉強のしめくり時にあたり、精根を傾けて授業して下さった結果、学生の間から、将来英語の専攻を決心する者が現れた。吉岡義睦、鈴木三郎、柳島彦作であった。先生は文典、作文の教科書に斉藤秀三郎のものを使用し、訳読にはドクトル・ジョンソン、カーライル、ラスキン等の文集を用い、徹底した鞭撻だった。

いま一つ、柳島君にしあわせだったことは、大学に進んだとき、岡崎法勝寺町に住んでいた、アイルランド生まれのニクソンという小柄で上品な老婦人と交際したことである。老女はひとり暮らしであったから、毒気のない柳島青年の来訪をよるこび、いつも紅茶にビスケット程度で接待してくれた。訪問は週四

回、夕食後二時間位、主としてその日の新聞記事を中心に英語で話しあい、そのあいだにややまりや、慣用句の使い方を教えてくれた。君の熱心は、炎熱の夕べも、雪のちらつく宵も、烏丸丸太町から、動物園の北まで通った。自分も折々同行したが、結局柳島君の熱心にはついて行けなかった。後年、「自分の英語の基礎は全くあの時にできた」と告白していた。読書力も高まり、英文のトルストイ、ドストエフスキー、ユーゴー等の小説をあさり、アダム・スミスの七〇〇ページの国富論も読んだ。

そして、この古本屋をよく廻った時代に、たまたまエマソンの論文集を見出したことは、彼の生涯中の最上の出来事だった。色あせた青表紙、細字のつまったエマソンを手にしてより、柳島の精神生活を培う書物としては、聖書を別として、他に求める必要はないようだった。大正六年十二月、軍隊に入ったときも、これを携えたり、精華大学へ登校の最後の日にも、飽のなかにエマソン論の原稿を入れていた。彼とエマソンとのつながりは、実に五十余年にわたった。

さて自分は、エマソンについてうといが、

参考に一英米文学史をひらくと、彼の家は九代牧師のつづいた家であり、父は早世して、賢明なる母が五人の男の子を育て上げた。エマソンは十五歳にてハーバード大学に入り、十八歳で卒業。その後、暫く女学校で教鞭をとり、次いでボストンのユニテリアン教会の副牧師となった。しかるに彼の思想信仰が独創的で、教会の因襲や儀式を守るにたえられなくなり、自由なる講演者に転向して米国内と英国からも招かれ、その講演を主とした全集は八巻となった。からだは強健でなかったが、七十九歳まで存命した。彼の信仰思想は超絶主義と呼ばれている。

柳島君が、エマソンに心酔した主因は、その深い人生についての觀察にて、読むごとに希望、勇気、光明をあたられたのである。エマソンの信仰は「生ける神、聖霊の導き、日々周囲に日常事の形にてあふれている奇蹟、広報の確実なること」等を認めたが、全体としては汎神論であった。このことは良寛、さらに遡って道元禪師にも共通する傾向である。

エマソンは思索のため孤独であることを愛し、毎日、コンコードの森の中を逍遙して、

自からのうちより湧き出る思想に耳を傾け、それを記録した。この形の思索生活は、はからずも彼の家の書生であったヘンリー・ソーロによって、大きく前進したのである。

ソーロ君は、先生のエマソンより十四歳年少だったが、本来の性格のうえに、先生の感化も手伝い、ウォールデンの森の沼の畔で二年間、孤独で生活し、リス、小鳥、蛙、森林を友とした。日記をつづり出版された。

このソーロの生活は、太平洋をへだてて、日本の良寛が越後の国、上山の五合庵でいとなんだ生活と似たものである。このような孤独生活ができるためには、精神に一つの前提条件が必要である。それはたとい一人暮しでも決して淋しさをおぼえないための汎神的思想である。すなわち、すべての周囲の人間外の有情無情のものを兄弟として親しみ、自分と同等に考えねばならない。そしてこのことをソーロも良寛も信じて実行したのだった。

柳島君は良寛を慕うて、その詩歌を英訳して評語を加え「大愚良寛」を残したが、そのなかにいっている。「真珠は母貝を犠牲にして取出されるが、良寛は自からを大自然のうちに没入して、その一部分とした。ほんとに彼

は山、岩、流れ、松、杉、草むら、また峰の上にただよう雲とさえも一体となった。周囲の静寂と荘厳にみいせられた」また「山中に独居して、良寛は最善のものは愛であることを知り、すべてのものを愛した」と。

ここでソローの言葉を一つ、対照的に紹介したい。いわく「この下界で、とぼと歩む自分には、どれだけ鶯が頭上を飛んでいるかわからない。鶯は最高の天上にかくされてゐるのだもの」。ソローは、鶯を、ソローに未開顯の真理にたとえ、それはたやすくとらえ得ないとおもうたのである。この数行のうちに、彼のウォールデンの森林生活がうかがえる。

ソローはエマソンの弟子だったが、次に良寛には真の師匠はだれだったろう。

良寛は日本曹洞禪宗の僧であった。従ってその宗祖道元禪師希玄を尊崇し、日夕、遺文を拝読し、その行履を踏まんとを希うたのだった。そして奇しくも、この道元禪師は、エマソンとは時代をへだて、国を異にしたがその信仰思想は汎神教的であった。いまきわめて簡単ながらそれを説明するために、禪師の歌集「叡松道詠集」より二首の和歌を取り出

し、みじかい注解を加えたい。「詠法華經溪の響嶺に鳴く猿たえだえに たゞこの経を説くところを聞け」。

また「本来面目 春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり」と。さきの歌は、峰に鳴くまじらの声、谷に響く水の音も、ともに仏性を具有したものである。次の本来の面目とは、終局的實在をさすもので、春夏秋冬の普通なる自然の変化も、みなこれ實在の顯現であるとの意味である。

禪師の思想は良寛に、うちなる生命として流れたから、彼は宗祖の根本的思想の表現である御歌を真似て、「辭世 形見とて何か残さん春は花 山ほととぎす秋はもみぢ葉」といった。

ソローと良寛は隠遁生活の経験を同じくし、その思想は、それぞれ源を先生のエマソンと道元禪師からゆずりうけたのだった。そして柳島はこの一連の關係の間に在って、東西の結び目の役割を果たしたのだった。

柳島君は詩人であった。残した詩集は四冊あり、風物詩の「京都と奈良」。随感的なる「鳥は鳴く」。大塚節治前同志社総長に隨行して、アメリカン・ボードの記念式典に列席し

たときの旅行見聞記「わがアメリカの旅路」。そして病氣に悩まされて「自分の残る日はかぞえられている」としきりに繰返した時の、沈痛なる詩集「白梅の花」である。なお、この本のおわりのページに、自分の短歌「深草はラッパの声も絶えはてて昔のままは夕暮の風」を訳して加えてくれた。

さて、ここで考えることは、日本詩史のうちで、柳島の詩はどのような位置を占めるだろうか。もとより、彼はペンマン・クラブのそとにあり、従って詩も日本詩界の迷い子である。けれども自分は断言したい、将来必ず彼の詩は注意をひき、わが文学史上に一定の場を占めるであろうと。そして、今彼の詩に批評を求められるならば、人間としての柳島は柳島として、一つのみがき上げたものであったごとく、彼の詩も彼独自のものであると答えたい。柳島の詩が英文であることも特徴である。

おわりに柳島の詩と「日本の美」について述べたい。このためには、川端康成氏のノーベル文学賞受賞のときの講演「美しき日本の私」を引用するのが近道である。

川端氏は世界的ヒノキ舞台での講演にて、